

## 書評

### 神戸女学院大学『讃美歌并樂譜』研究会

#### 覆刻『讃美歌并樂譜』及び『解説』

(新教出版社)

神戸女学院図書館の所蔵する「オルチン文庫」には、宣教師ジョージ・オルチンが蒐集し寄贈した、初期の日本語讃美歌が、一五〇点も収められている。その一部の十二種類は、『覆刻明治初期讃美歌』として、一九七八年に出版された。昨年末、新たにこの「オルチン文庫」にある『讃美歌并樂譜』の覆刻版が『解説』とともに新教出版社から出版された。これは学院チャプレンの茂洋教授を代表とする「覆刻『讃美歌并樂譜』研究会」の研究成果である。

『讃美歌并樂譜』の表紙には「明治十五年三月 大阪上梓」と書かれている。別冊の『解説』の巻頭に書かれた原恵青山学院教授の論稿「日本讃美歌史における『讃美歌并樂譜』によると、これは日本で明治時代に出された讃美歌としては、二番目に古いものだそうである。

茂先生の論稿「『讃美歌并樂譜』の背景と構成」によると、

明治十年（一八七七年）に長崎で出たメソジスト派の讃美歌にすでに五線紙による楽譜がついていたが、全部の歌に楽譜をつけたのは、この讃美歌が日本最初のものであるようだ。開いてみて気がつくのは、見開きに、二つ、或いは三つの違った讃美歌の歌詞が収められているのに、楽譜が一つしか印刷されていないことである。これも原先生や茂先生の解説によると、違った歌詞を、同じ楽譜で歌ったものだそうである。

茂先生の論稿を読むと、この讃美歌の源流として、組合教会と横浜を中心とする一致教会で作られた讃美歌集がいくつかあり、それらが相互に影響しあっていたものであることがよく分かる。その系譜は、更に『解説』巻末に付けられた、図書館員の奥祥子さんの作成になる表「『讃美歌并樂譜』からみた歌の変遷」と、「日本讃美歌集系統図」によって、現在用いられている讃美歌まで辿ることができる。またこれを見ると、一九二三年（大正十二年）の『日曜学校讃美歌』まで、日本で作られた初期の讃美歌集の殆どが「オルチン文庫」に集められていることも分かる。

茂先生の論稿においては、更に、この讃美歌集に収められた讃美歌がアメリカの長老派の讃美歌集 *The Church Hymn Book* や組合教会の讃美歌 *The Sabbath Hymn and Tune Book* などから

採られたこと、またいくつかは、この讃美歌集のために新たに作られたことが明らかにされている。原曲がどれであるかは、二つを除いて判明したが、歌詞を日本語に訳した人が誰であるかという点については、訳詞者の名前の分かっているものは少ないようである。

この讃美歌集ができるまで宣教師達がどのように尽力したかについては、史料室の若山晴子さんが「明治初期讃美歌に関する史料蒐集」という論稿で、「米国伝道会宣教師文書」や神戸で発行されていた基督教週刊紙『七一雑報』の記事などを使って明らかにしている。それによると、この讃美歌集は、明治十五年三月十日に初版が単価二〇銭で売り出された後も、直ちに改訂が加えられ、同年五月には、六つの歌と五つの楽譜を追加した改訂版が出版されている。(茂先生の解説によると、今度の覆刻版の百一四頁から百二〇頁は、この改訂版から取られている。)また、十月には楽譜なしのものとしてローマ字のものも出版された。若山さんが、この論稿の中で「心を打たれたのは、伝道団の讃美歌改良にかける飽くなき熱意である」と言われているのに、同感である。

この『讃美歌并楽譜』を編集した、組合教会の宣教師カーティスについては、若山さんのもう一つの論稿「ウィリアム・ウ

ィリス・カーティス師の生涯」が、「宣教師文書」に収められている彼の書簡などを縦横に使って、明らかにしている。それによると、彼は神戸女学院の第二代校長であったクラークソン先生と同じく、一八七七年(明治十年)に、同じ船で神戸へやってきた。二年後、彼は歌五七、讃詠六を含む『さんびのうた』を発行する。一八八〇年、妻のデリアを病気で失ったカーティスは、『讃美歌并楽譜』を出版して間もなく、自分も健康を害して帰米したが、再婚した後、一八八六年(明治十九年)再び来日し、仙台で伝道を開始する傍ら、東華學校で教鞭をとる。一八九一年、同校が閉校になると、北海道で伝道を続ける。一八九七年(明治三十年)、リディア夫人の病氣悪化のため、米国に帰った後、日本への三度めの渡航を希望しながら、健康上の理由から許されず、伝道会を退き、一九一三年に急逝する。これまで余り知られることのなかったこのアメリカ人宣教師の感動的な生涯を未公刊の史料に基づいて掘り起こされ、叙述された若山さんの努力に敬意を表したい。

『讃美歌并楽譜』の翻訳について」と題する論稿で、原田園子助教は、原詞が英語の讃美歌であることが確認された四九篇の讃美歌の歌詞を検討した結果を報告されている。原田先生は、歌詞を原詞に忠実に訳したものや、部分的に改められてい

るもの、節の数を減らしたり構成は変えたが、内容はすべて盛り込んであるものなどに分類し、表を作られ、更に、原詞を特定するという非常に厄介な仕事をされている。原詞と日本語訳を比較して、「原詞の語句が日本的感性に訴える表現に置き換えられている」という原田先生の指摘は、外国語の詩を日本語に訳すことの困難さを認めた上でなお、正しい指摘であるように私には思われる。

『新体詩抄初編』と『讚美歌并樂譜』と題する論稿で、山内祥史教授は、井上哲次郎・矢田部良吉・外山正一たちによって『讚美歌并樂譜』より五か月後に出版された『新体詩抄初編』に対して、この讚美歌集がどのような影響を与えているかの考察は、今後に期待されると述べておられる。

『解説』の「あとがき」で茂先生が述べておられるように、神戸女学院図書館所蔵の「オルチン・コレクション」は、「讚美歌史」とってだけでなく、日本の西洋音楽史にとっても貴重な文献である。その一部が、このような周到な解説を付して、公刊されたことは、同じ学院に勤務するものとして、喜びに堪えない。それと同時に、今後このような貴重な史料を活かした研究が学内の研究者を中心になされることを期待したい。

(史料調査室長 大野篤一郎)

### 『讚美歌并樂譜』覆刻のこと

この讚美歌集は、日本で初めて、全曲に五線譜(木版)の楽譜をつけて印刷されたもので、菊判、右綴じ、一二〇頁。これを覆刻し解説をつけることは、一九八九年度神戸女学院大学研究所の総合研究の一つとして着手され、このほど完成して、新教出版社から限定版三〇〇部が出版された。印刷は『讚美歌』印刷の老舗・河北印刷株式会社。出版に際して出された「ちらし」には、以下のような説明があった。

「〔前略。〕この『讚美歌并樂譜』は、見開きに一曲または二曲の楽譜と歌詞が配置され、楽譜に合わせて歌えるように工夫された、日本で最初の本格的な楽譜付き讚美歌集である。一八八二年(明治一五年)に、大阪にあった美国派遣宣教師事務局〔中略〕から発行された。編者は宣教師 W・W・カーテイスである。

天地二三・八センチ、左右一五・三センチの上製本、本文は木版刷り一二〇頁、〔中略〕讚美歌一三〇篇と讚詠一八篇が収録されている。

神戸女学院図書館所蔵の原本から(原本に挿入されていた「正誤表」をも漏らさず)、最新の印刷技術を駆使して精密な覆刻版を製作し、菊判、八八頁の別冊解説〔執筆者名略〕を付して頒布することとなった。――

『学院史料』本号巻頭の口絵としてこの覆刻版の写真を掲げ、出版の記念とした。――

――本誌編集部